



TITLE:

(随想)就任所感

AUTHOR(S):

加藤, 篤二

---

CITATION:

加藤, 篤二. (随想)就任所感. 泌尿器科紀要 1967, 13(4): 263-264

ISSUE DATE:

1967-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/113136>

RIGHT:

〔泌尿紀要13巻4号〕  
昭和42年4月

# 泌 尿 器 科 紀 要

第 13 巻 第 4 号

昭和 42 年 4 月

## 随 想 就 任 所 感

京都大学教授 加 藤 篤 二

この度はからずも稲田教授のお跡をひきつぐことになりました。果してよくその任に耐え得るか疑わしい次第であります。

駄足ながら私の略歴を始めに一寸述べさせて戴きます。生れは愛知県一宮市で一宮中学、姫路高校をへて昭和10年京大医学部を卒業、家が代々皮膚科医でありましたので定石通り松本信一先生の門に入り皮膚科学を専攻、主論文は膿皮症の研究であります（なおこの間2年半今の名古屋市大に勤務しました）。先生は御承知のように昨年文化功労賞を得られましたが、博覧、強記、語学に秀でられ、臨床、研究共に稀れにみる大家でありまして、泌尿器科方面でも外陰部前癌症、実験的膀胱癌、膀胱の上皮、免疫、吸収、内圧、尿管運動、尿石の研究等数限りなく、特に研究の方法という点に啓発をうけました。当時は皮膚泌尿器科で泌尿器科は井上五郎助教授が臨床を担当されていました。所謂臨床一点張りの厳格な先生で、いつの手術日も大荒れで平穩無事な日はなく、お蔭で教室員は術後紅燈の巷にさまようことが多かったようです。特に論文は一々参考文献までも熟読され従って孫引き文献に誤りでもあろうものなら直ちに没書になった先輩が数限りなかった次第、むろん小生のごときは先生の目にも止らなかった存在で、泌尿器科4代の跡目をついだことを地下では定めし苦笑されていることでしょう。

井上先生は教授になられて間もなく定年退官され、代りに大連病院より柳原英先生が来任されましたが、お顔を存じている教室員がなく小生が独り京都駅にお迎えをした次第です。当時はあわただしい世相で小生は間もなく応召、京都深草の歩兵連隊に入り直ちに出征、仏印、泰、をへてビルマ作戦に参加し、雲南、ミイトキーナ、インパール作戦に従軍し、終戦後はラングーンで苦難の捕虜生活を2年致しました（その詳細は当時私の大隊にいた部下の会田雄次伍長すなわち今評論家として有名な京大人文科学研究所の教授のしたためた“アーロン収容所”に記載されております）。昭和22年荒涼たる広島の子品に復員、帰学後は医専教授として山本俊平教授に仕え、ついで昭和25年稲田教授が泌尿器科教室を主宰されると共に助教授として昭和31年まで仕えました。当時は未だ終戦後の混乱が回復せぬ世情でありましたがこの間に全国学会を2回、中部学会を1回、何れも皮と泌合同の難しい仕事の舞台裏役をさせられました。泌尿器科では楽四会と称してよく学びよく遊び再三奇妙な場所で読書会を開き後は例のごとく麻雀会に終始する等楽しい日々でありましたが、その頃の連中が今諸方の大学教授なり官立病院の部長として沢山活躍されているのは一重に稲田教授の御指導の賜と思います。

昭和31年4月丁度桜花爛漫の頃柳原英先生の後任として当時呉にあった広島大学医学部に赴任、医学部の広島移転と共に荒ばくたる思い出の原爆都市広島に移り以来11年の間私の一生の大半の業跡が沢山の優秀な門下によってなされたことは終生忘れ得ない感激であります。

卒業30有余年を通じて思えば5人の大先生に仕えた訳ですがその間顧みて至らぬ点が多いことを痛感しております。この5人の先生の人物、性格は何れも特異でありまして、臨床診断ならびに研究方法が極めて適切であり、あるいは臨床に徹しきった態度、円満な人格、洋々たる風格、熟慮断行型等何れもその顔貌には深い年輪がくみとられ恩師として学ぶべき点が多々ありました。およそ大木は根本におればその大きさが不明でありましてむしろ少し離れてみるとよくその大きさが判るようであり、何れも私の一生の進路に影響する処が大でありました。

何分にも私は戦前の皮膚泌尿器科時代の出身で（かような経歴の方は原田、落合、大越、大村諸氏等多数ありますが）その点でも旧式であり、生れも明治の末年でしかもビルマ作戦に生き残ったいわば敗残兵であります。幸いに無病息災、これからは野戦でできた闘魂をもって後進を指導して行きたいと思っております。

学術雑誌の編集は松本先生時代皮膚科紀要を約5年に亘って下働きを致しました。相当の難事業で今もなお当時の刊行物をみて回想することがあります。昭和30年稲田教授が泌尿器科紀要の発刊を思いたたれ主幹として今日まで12年間実に立派な運営をされて今日の隆昌をもたらされました。今後はこのレベルを低下せしめないよう只管努力をせねばなりません。

泌尿器科学は近年益々発展の一路を辿り、研究論文の発表機関としては日本泌尿器科学会雑誌の他に、臨床泌尿器科、皮と泌があり、それぞれの行き方で何れも立派に刊行されておりますが、この方面の雑誌はいくら多くても悪い筈がなく、泌尿器科学の発展に資する処が少くないと考えます。

本紙の大体の編集方針は従来のごとく、随想、原著、臨床例、治療等の順序を継承する筈でありますが、随想は他科の権威よりみた泌尿器科学についての御意見を願う予定であり、なおこの他臨床と剖検、あるいは診断不明例といったものも沢山加えて行きたいと思っております。

以上につき今後宜しく皆様方の御協力をお願い致します。